

## 報告 子育てクドバスの課題と方法

若者文化研究所 西村美東士

---

### 1 子育て学習へのクドバスの活用

2004年、大学授業で初めてクドバスを行った(「クドバスを活用した子育て学習の内容編成」)。未来の母親である女子学生を対象にして、高校生の子をもつ親の必要能力の構造をチャートとしてまとめ、全25回の学習プログラムを作成したものである。

一方、現役の親に対しては、日本子育て学会大会において、12人全員参加のクドバスを行った(「わくわく子育てに必要な能力」)。ここでは、リアルな子育て当事者の現場の問題意識を共有し、そこからいわば帰納法的に必要な能力を構造化することができた。

### 2 クドバスの汎用性と活用上の課題

クドバスは1990年の発足当初から、汎用性に優れていたため、「原型」に近いものから遠いものまで、多様に展開されている(「クドバス活用による親能力確実習得プログラム研究」)。そして、創始者の森和夫自身が、広い分野でクドバスが使われ、実証されることを望み、無償で公開されていた。しかし、今日までに検証が進み、クドバスが一定程度完成に近いものになり、マニュアルは有償化され、その内容も経験を重ねて洗練されたものになっている。

そのとき重要なことは、「原型」と違う活用をする場合の功罪を把握しておくことだと考える。私なりのクドバスの「原風景」ともいべきイメージは、「その仕事をよく知るメンバーが、共有した職業人像や課題のもとに5~6人で作業する」というものである。

### 3 子育てクドバスの課題

これまで社会教育においては、「家庭教育」は「腫れ物にさわらないような扱い」を受けてきた。それは、家庭教育は親の個人的価値観にゆだねられるべきものであり、その価値観を侵害してはならないという「自制」があったからである。しかし、親が子育てに迷う時代において、「どんな価値が正しいか」ではなく、「どんな能力が必要か」を追求するクドバスなら、そのような心配は不要と考えてよいだろう。しかも、クドバスは、当事者としての親の参画のもとで行われるわけだから、そこで新たな価値観が形成されたとしたら、それは個人の価値観の侵害にはならないはずである。

しかし、子育てクドバスの場合、家庭の状況、個人の価値観や子育ての目的が多様なため、先述の「原型」を守ることは困難である。その場合でも、課題や目的を共有して、クドバスの「当事者参画」や「現場のリアリティの反映」という特長を実現する必要がある。

### 4 子育てクドバスの方法

このリアリティの確保のため、「高校生の子をもつ親」というテーマは、大学生が身近に見ていて記憶に新しいという理由から設定した。「わくわく子育てに必要な能力」の場合は、参加者のなかから一人、対象を選定し、その人の子育ての状況に基づいて「能力カード」を書くことにした。そのことによって、よりリアルなチャートが作成できると考えたからだ。

現在、こども家庭庁の「こども未来戦略加速化プラン」においては、親などによる参画・協働どころか、親の子育て能力の育成さえ触れられていない。これは、先に述べた「自制」によるものであろう。しかし、だからこそ、「当事者参画」を実現するクドバスの出番だと考えたい。

以下、長文につき削除する前の原稿を掲載します。

## 報告 子育てクドバスの課題と方法

若者文化研究所 西村美東士

---

### 1 子育て学習へのクドバスの活用

2004年、大学授業で初めてクドバスを行った(「[クドバスを活用した子育て学習の内容編成](#)」)。未来の母親である女子学生を対象にして、高校生の子をもつ親の必要能力の構造をチャートとしてまとめ、全25回の学習プログラムを作成したものである。子育てやキャリアに関する意識向上の効果を感じ、その後、たびたび大学授業のワークとしてクドバスを活用してきた。

一方、現役の親に対しては、日本子育て学会大会において、12人全員参加のクドバスを行った(「[わくわく子育てに必要な能力](#)」)。ここでは、リアルな子育て当事者の現場の問題意識を共有し、そこからいわば帰納法的に必要な能力を構造化することができた。

### 2 クドバスの汎用性と活用上の課題

クドバスは1990年の発足当初から、汎用性に優れていたため、「原型」に近いものから遠いものまで、多様に展開されている(「[クドバス活用による親能力確実習得プログラム研究](#)」)。そして、創始者の森和夫自身が、広い分野でクドバスが使われ、実証されることを望み、無償で公開されていた。しかし、今日までに検証が進み、クドバスが一定程度完成に近いものになり、マニュアルは有償化され、活用方法も経験を重ねて洗練されたものになっている。

そのとき重要なことは、「原型」と違う活用をする場合の功罪を把握しておくことだと考える。私なりのクドバスの「原風景」ともいべきイメージは、「その仕事をよく知るメンバーが、共有した職業人像や課題のもとに5~6人で作業する」というものである。同じ職種でも、職場が違えば課題は異なる。それでも、課題を共有してチャートを作成し、ラダーとして積み上げることには大きな意義がある。なぜならば、価値観が多様化し、労働人口が流動化し、個性の発揮が求められる今日だからこそ、その職場での共通の必要能力(=教育目標)が示されることは、人材育成の根拠となるからである。

### 3 子育てクドバスの課題

これまで社会教育においても、「家庭教育」は「腫れ物にさわらないような扱い」を受けてきた。それは、家庭教育は親の個人的価値観にゆだねられるべきものであり、その価値観を侵害してはならないという「自制」があったからである。しかし、親が子育てに迷う時代において、「どんな価値が正しいか」ではなく、「どんな能力が必要か」を追求するクドバスなら、そのような心配は不要と考えてよいだろう。しかも、クドバスは、当事者としての親の参画のもとで行われるわけだから、そこで新たな価値観が形成されたとしたら、それは個人の価値観の侵害にはならないはずである。

問題になるとすれば、そこにファシリテーターが介入して、白紙ではない何らかの価値観に誘導することであろう。評論家が母親と娘の仲がいいことを「友達親子」と呼んで批判していることについて、大学でのクドバスで学生たちは「悪いことではない」と猛反発した。もう一つ、青少年指導者が私に言った「いやでも子どもを産むように教えよ」という言葉とともに、学生から顰蹙を買った言葉である。学生たちは、能力カードに「叱るべき時は叱ることができる」も書けるのだ。クドバスの当事者性は最大限に尊重しなければならない。

#### 4 子育てクドバスの方法

体験的には、クドバスは「原型」に近づけば近づくほど、当事者性と現場的、臨床的なリアリティに近づくと感じている。「高校生の子をもつ親」というテーマは、大学生が身近に見ていて記憶に新しいという理由から設定した。「わくわく子育てに必要な能力」の場合は、参加者のなかから一人、対象を選定し、その人の子育ての状況に基づいて「能力カード」を書くことにした。そのことによって、よりリアルなチャートが作成できると考えたからだ。

また、子育て支援サークルなどのクドバスにおいては、参画活動の必要能力がより鮮明に表される。個人の子育てでは想定しにくかったラダーも、ここでは可能になるだろう。

現在、こども家庭庁の「こども未来戦略加速化プラン」においては、親などによる参画・協働どころか、親の子育て能力の育成までも視野にない様子である。これは、先に述べた「自制」によるものであろう。しかし、子育てクドバスの立場からは、それはSWOT分析でいえば0(機会・チャンス)にあたる事項であり、クドバスの出番なのだと考えたい。

#### その他

映像を活用した暗黙知教材の作成

親子 甘えられる 支援者とは異なる目線

個人完結型から社会開放型への子育て観の転換

よりよくわが子を見る